

研究論文

同志社のヘンデル《メサイア》演奏史
—— 初期の試みから復活第10回（1974年）まで ——

津 上 智 実

Doshisha's Performances of Handel's *Messiah*, from its Beginning to 1974

TSUGAMI Motomi

要 旨

本稿の目的は、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の本邦演奏史において、先駆的な役割を果たしてきた同志社の初期の演奏について、その実態を現物史料に基づいて明らかにすることである。同志社交響楽団 OB 会から提供されたメサイア・ファイル第 1 冊所収のプログラム 19 点（1933～1974）と前窪一雄『同志社混声合唱団年譜稿』（2004）を主たる対象として、実際にどの楽曲が演奏されたのかを調査した。

その結果、1）戦前の演奏では第 2 部〈ハレルヤ〉で終わっていたが、戦後は第 3 部の終結合唱まで演奏されるようになったこと、2）1955 年の三大学合同演奏は、同志社の公式カウントでは除外されているが、同志社《メサイア》演奏史上、重要な分岐点となっていること、3）1954 年までは同志社混声合唱団主催で合唱指揮者が指揮したが、1955 年以降は同志社交響楽団主催で学外から指揮者を招く形となったこと、4）1965 年以降の「復活メサイア」で、演奏曲目はほぼ安定し、プラウト版で補遺に置かれた 7 曲をカットする習慣が保持されたこと、等が判明した。

《メサイア》演奏史は、世相を映すと同時に、同志社の精神史の一端を雄弁に物語ってくれる。

キーワード：同志社、ヘンデル、メサイア、演奏史、合唱研究

Abstract

This paper aims to clarify the actual contents of Doshisha's early performances of G. F. Handel's oratorio *Messiah* (1741), based on historical materials such as concert program booklets, as Doshisha is known to be a pioneering force in the performance history of this oratorio in Japan.

Based on the nineteen program booklets (1933-1974) in the first volume of the *Messiah* files provided by the Doshisha Symphony Orchestra Alumni Association and Kazuo Maekubo's *Doshisha Mixed Chorus Chronology* (2004), it has been searched which numbers of *Messiah* were performed in each performance of the oratorio.

As a result, the following points were clarified. 1) The prewar performances of *Messiah* concluded with the final chorus of the second part, "*Hallelujah*," omitting the whole third part, but after the war, the performances were expanded to the final chorus of the third part. 2) Although the joint performance of *Messiah* by three universities (Doshisha Symphony Orchestra, Kwansei Gakuin Glee Club, and the Music School of Kobe College) in 1955 is excluded from Doshisha's official count of 'All Doshisha *Messiah* performances', it seems to be an important turning point in the history of Doshisha's *Messiah* performances. 3) Until 1954, they were sponsored by the Doshisha Mixed Chorus and conducted by the chorus conductors, but after 1955, they were sponsored by Doshisha Symphony Orchestra, conducted by professional conductors invited from outside of the University. 4) After 1965, sponsored by the All Doshisha *Messiah* Executive Committee, the number of pieces performed for "Revived *Messiah*" remained almost constant, clearly retaining the custom of cutting out the seven numbers placed in the appendix in the popular version edited by Ebenezer Prout.

The performance history of *Messiah* reflects the social situation at the time and simultaneously provides a glimpse into Doshisha's spiritual history.

Keywords: Doshisha, Handel, *Messiah*, performance history, choir studies

0. はじめに

本稿の目的は、ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル Georg Friedrich Handel (1685～1759) のオラトリオ《メサイア *Messiah*》(1741) の本邦演奏史において、先駆的な役割を果たしてきた同志社の初期の演奏について、その実態を現物史料に基づいて可能な限り明らかにすることである。

先行研究の「本邦における《メサイア》受容について」で河村泰子は、「おおむね1970年代以降は全国的に多数の団体が定期的に本作品を上演していることが判明した」と述べた上で、「主導的団体」として同志社、KAY 合唱団¹⁾、東京芸術大学の3団体を取り上げた(河村 2020, 57)。筆頭に挙げられた同志社は、1935年という早い段階でその《メサイア》演奏がNHKによって全国中継放送された点でも特筆され、先駆的な活動を展開した団体と位置付けられている。

筆者は先に神戸女学院における《メサイア》演奏歴を概括し(津上 2020)、また《メサイア》の日本初演について論じたが(津上 2023a)、その際、《メサイア》演奏と言っても千差万別で、演奏の中身は実に様々であることを実感した。とりわけ戦前の演奏においては、《メサイア》中の相当数の楽曲がカットされる形で演奏されていたのである。近年のプロフェッショナルな演奏団体による舞台上演や録音等(これらは基本的にカットなしの全曲演奏²⁾)に慣れ親しんだ人間からすると、信じられないような大幅なカットが行われている。

このような事実を踏まえて、ここでは同志社における《メサイア》演奏の実態、すなわち実際にどの楽曲(ナンバー)が演奏されたのかという演奏の中身を、演奏会プログラム冊子の現物に当たることによって解明することを目指す。対象としては、初期の試みから1974年の「復活第10回」までを扱うこととする。これは史料のまとまりの問題によるもので、それについては第1節で述べる。

1. 資料の所在と調査対象

同志社は、1875(明治8)年11月29日に新島襄(1843～1890)によって創立されたキリスト教主義の学校で、その後の変遷と発展を経て、現在は「2つの大学、4つの中学・高等学校、2つの小学校、幼稚園およびインターナショナルスクールの併せて14の学校を擁する総合学園」³⁾として、京都の地に根を張っている。

『同志社五十年史』(1930)や『同志社百年史』(1979)等の同志社関係の公式史書では、項

1) KAY 合唱団は、恵泉女学園、青山学院、YMCA から成る合唱団で、3団体のイニシャル(K, A, Y)を組み合わせ命名されている。音楽監督の奥田耕天(1908～2001)のもと、1948年の結成から2010年の最終公演まで《メサイア》を中心にオラトリオの演奏を継続的に行った。

2) 《メサイア》は全3部からなり、後述のプラウト版のカウントによれば、第1部21曲、第2部23曲、第3部9曲の全53曲で構成されている。

3) <http://www.doshisha.ed.jp/schools/index.html> (2023-9-3アクセス)

目として「メサイア」を取り上げた記述はなく、学内の各種団体に関連して散発的な記載があるに留まる。

その中で、同志社女子大学学芸学部音楽学科発行『音楽学科の変遷——その誕生から半世紀』（2006）が、付録として「全同志社メサイア演奏の歴史、歩み」と題された一覧表（以後、「一覧表」と略記）を掲げている。ここには、各《メサイア》上演の「回数」「開催日」および「指揮」「ソプラノ」「アルト」「テノール」「バス・バリトン」「オルガン」「ピアノ」の出演者名が列挙されている（pp. 240-241）。

この「一覧表」は、全同志社《メサイア》演奏の歩みを、「戦前」（1935年と1940年）、「戦後」（1946年から1956年までの11回）、「復活」（1965年から2000年までの36回）の3つに分けている。この分け方は関連史料で広く共有されており、公式カウントとなっているので、本稿もこれを尊重する⁴⁾。

しかしながら、この「一覧表」では《メサイア》のどの楽曲を演奏したのかは分からない。やはり現物史料、すなわち演奏会当日に会場で配布されたプログラム冊子に当たる必要がある。

今回の調査では、同志社交響楽団 OB 会から提供された《メサイア》演奏会ファイルの第1冊に収められたプログラム冊子（1933年から1974年までの19点）と、同志社混声合唱団の指揮者であった前窪一雄（1920～2019）がまとめた『同志社混声合唱団年譜稿』（私家版 2004）を主たる調査対象として⁵⁾、その他の関係史料によって補強するという形で進める。

- （1）同志社交響楽団 OB 会提供の《メサイア》演奏会ファイル第1冊に収められたプログラム冊子（1933年から1974年までの19点）⁶⁾
- （2）前窪一雄著『同志社混声合唱団年譜稿』（私家版 2004）（1925年から1954年まで）

まずは、これらの史料を元に作成した2つの表を次々頁以下に掲げ、それに基づいて考察を行うことにする。

2. 掲載の2つの表と曲番（ナンバー）の表示方法

次々頁以下に掲げる表は、「表1：同志社《メサイア》演奏歴」と「表2：演奏曲目一覧」である。

「表1：同志社《メサイア》演奏歴」は、《メサイア》演奏の「年月日」「演奏会名（会場名）」「演奏曲目数」「指揮者名」に絞って記載している。独唱者やオルガニスト、ピアニストの名前は、上記「一覧表」に掲載があるので割愛した。初期の演奏については、関連史料から細かい演奏機会（〈ハレルヤ〉1曲のみといったもの）も可能な範囲で拾ったが、1965年以降につい

4) 後掲の表2で、縦に太線を引いて「戦前」「戦後」「復活」を区分している。

5) これらの史料に辿り着いた経緯と史料保存の問題点については別稿で論じている（津上 2023b）。

6) 同志社交響楽団 OB 会蔵の《メサイア》演奏会プログラム類は、その後、同志社交響楽団に移管され、その際にファイリングの改変が行われた（津上 2023b）。

ては、そのような扱いはしていない。

「表1」の詳細について補足すると、左欄に【 】で補記したのは「一覧表」の回数、すなわち公式に認知された《メサイア》の上演回数である。「演奏曲目数」については、プログラム冊子（以後、「冊子」と略記）があるものについては「表2」で詳細を知ることができるので、各部（第1部から第3部）⁷⁾の曲目数を掲げるに留め、冊子未見のものについては、演奏曲目数に加えて、どの楽曲が演奏されたのかを、分かる限りで書き入れた。〔 〕で伴奏形態（オルガン、ピアノ、管弦楽）、右欄の【 】で主催者を入れている。

「表2：演奏曲目一覧」では、左側に「プラウト版の曲番」（後述）と「曲種（レチタティーヴォ、アリア、合唱等）」「歌い出しの歌詞（インチピット）」を短く示した上で、各年の演奏曲目（ナンバー）を数字（冊子に記載された曲番）ないしは丸印（冊子に曲番表記がない場合）で示している。

ここで、曲番（ナンバー）の表記方法を明確にしておく必要がある。というのも、《メサイア》は作曲者の生前に36回演奏されて、上演の度に曲の改訂やアリアの差し替えが繰り返し行われたため、多数のヴァージョンが存在し、決定稿と言えるものがないという事情を抱えた特殊な作品である。個々の楽曲のカウン트의仕方も、使用楽譜のヴァージョンや演奏者によってまちまちなので、曲番を一元的に示すのは困難である。

実際、同志社の《メサイア》冊子でも、演奏する曲順に番号が打たれているもの（省略曲はノーカウントで、曲番が連続する）もあれば（1950年以前）、プラウト版の曲番で演奏曲目を記載しているもの（省略曲は欠番となるので、曲番は不連続となる）（1955年以降）、さらには曲番を記さずに対訳のみを掲載しているものもあって（1965、1966、1970、1971、1972年）、バラバラである。

本稿では便宜上、戦前から戦後にかけて世界的に広く使用されたプラウト版（Ebenezer Prout: *Handel, The Messiah*, London & New York: Novello 1902）の曲番（ナンバー）を使用する。表2の左端欄に記載したのがプラウト版の曲番で、本稿の議論は基本的にこの曲番で進める。

一方、表2の本体では、冊子の表記を尊重して、冊子に記載された曲番を転写している。対訳のみで曲番のない冊子の場合には、演奏曲に丸印を付した。

前年と同じ演奏曲目の場合、歌詞対訳が冊子に印刷されないことがある。1966年は前年と同じ曲目だったので、冊子には対訳を掲載せず、別紙の色紙で対訳を刷って冊子に挟み込む方法が採られた。5年後にも同様の例がある。1971年の冊子には曲目一覧も対訳も掲載がなく、「鑑賞の手引き」（p. 11）で14曲⁸⁾の聞き所が解説されているのみで、詳細は不詳であるが、おそらくは1966年と同様の扱いがなされたと考えられる。そこで演奏の推測される楽曲に三角印を、「鑑賞の手引き」で言及された14曲に丸印をつけて区別した。

では「表1」と「表2」の2つに依りながら、演奏曲目の変遷を考えてみよう。

7) 《メサイア》は台本作者のチャールズ・ジェネンズ Charles Jennens (1700～1773) によって3部に分けられており、ヘンデルもこの区分に従っている。

8) 「鑑賞の手引き」で言及されているのは、Nos. 1, 9, 12, 13, 18, 20, 23, 24, 33, 43, 44, 46, 48, 53の14曲。

表1：同志社《メサイア》演奏歴

略号：*P = 配布プログラムのあるもの、D = 同志社、M = メサイア
 DMC = 同志社混声合唱団、DSO = 同志社シンフォニー・オーケストラ
 I = 《メサイア》第1部、II = 同第2部、III = 同第3部、pf = ピアノ、org = オルガン

年月日	タイトル（会場）	曲目	指揮者
戦前			
1918-6-21	第1回中学部文芸大会 (D 公会堂)	ハレルヤ (=No. 44)	藺川四郎
1918-6-22	大阪教会日曜学校	同上	藺川四郎
1925-11-28	D 創立50周年記念イヴ音楽会 (岡崎公会堂)	ハレルヤ	柳兼子
1933-6-24	D 宗教楽協会第2回定期演奏会 (D 栄光館)	I：3曲、II：3曲、*P 【主催：D 宗教楽協会】	F. クラップ DSO
1935-10-28	D 創立60周年記念イヴ大音楽会	1曲 (No. 12)	森本芳雄
1935-10-29 【1】	D 創立60周年記念音楽会 (D 栄光館) (NHK 全国中継放送)	I：21曲 (No. 7 以外)、II：14曲か (Nos. 40, 42, 43, 44を含む)、ドイツ語歌唱	森本芳雄 (弦楽 DSO, pf, org)
1935-10-30	D 創立60周年記念音楽会 (大阪中之島公会堂)	= 同上、*P 【主催：D】	森本芳雄
1935-11-22	「救世主」演奏会 (和歌山公会堂)	同上か？	森本芳雄
1940-11-23 【2】	紀元二千六百年奉祝音楽会 (D 栄光館)	I：14曲、II：9曲、日本語訳歌唱、*P	森本芳雄
1941-12-6	卒業記念音楽会 (D 栄光館)	ハレルヤ	
戦後			
1946-11-23 【1】	聖譚曲「救世主」(D 栄光館)	合唱は I：2曲 (Nos. 4, 17)、II：1曲 (No. 44) の計3曲、独唱4曲	森本芳雄 前窪一雄, org
1946-11-28	D 創立71周年記念音楽会 (D 栄光館)	ハレルヤ	
1947-5-25 【2】	「M」湯浅先生の総長就任を 記念して (D 栄光館)	I：15曲、II：9曲、III：5曲、*P 【主催：DMC】	森本芳雄 org
1947-11-23 【3】	「M」(D 栄光館)	同上 + I：3曲 (Nos. 7, 9, 12)、II：3曲 (Nos. 25, 26, 33)、合唱13曲、独唱26曲	森本芳雄 org, pf
1947-12-14	「M」 (ランサー・シアター)	同上 (進駐軍基地にある教会の礼拝サービス)	
1947-12-21 14:00	「M」(キョウト・ステートサイ イド・シアター)	同上 (同上)	
1947-12-21 19:30	「M」 (大津進駐軍基地チャペル)	同上 (同上)	
1948-12-5 【4】	聖譚曲「救世主」全曲 (D 栄光館)	I：21曲、II：14曲、III：5曲、*P 【主催：DMC】	森本芳雄 DSO
1949-12-4 【5】	聖譚曲「救世主」全曲 (D 栄光館)	I：18曲、II：10曲、III：5曲、*P 【主催：DMC】	森本芳雄 DSO
1950-1-28	D 創立75周年記念音楽会 (大阪：毎日会館)	I：13曲、II：1曲、*P 【主催：D】	森本芳雄
1950-12-23 【6】	オラトリオ「M」 (D 栄光館)	合唱は I：5曲 (Nos. 4, 9, 12, 17, 21)、II：3 曲 (Nos. 22, 24, 44)、III：2曲 (Nos. 46, 53) 【主催：DMC】	森本芳雄 (1951-11-20没) DSO

年月日	タイトル（会場）	曲目	指揮者
1951-12-16 【7】	(D 栄光館)	合唱は I : 3 曲 (Nos. 4, 9, 12)、II : 3 曲 (Nos. 22, 24, 44)、III : 2 曲 (Nos. 46, 53) 【主催 : DMC】	前窪一雄 (org)
1952-12-14 【8】	聖譚曲「救世主」全曲 (D 栄光館)	合唱は I : 5 曲 (Nos. 4, 9, 12, 17, 21)、II : 3 曲 (Nos. 22, 24, 44)、III : 2 曲 (Nos. 46, 53) の計 10 曲、独唱あり（詳細不詳）【主催 : DMC】	前窪一雄 (org)
1953-12-6 【9】	聖譚曲「救世主」 (大阪女学院講堂)	合唱は I : 6 曲 (Nos. 4, 7, 9, 12, 17, 21)、II : 5 曲 (Nos. 22, 24, 25, 26, 44)、III : 2 曲 (Nos. 46, 53) の計 13 曲、独唱 23 曲（詳細不詳）	前窪一雄 (org)
1953-12-13 【9】	聖譚曲「救世主」 (D 栄光館)	同上 【主催 : D 大学、DMC】	前窪一雄 (org)
1954-12-17	聖譚曲「救世主」大演奏会 —NHK 歳末たすけあい運動 (産経会館)	合唱 10 曲	山田和男
1954-12-19 【10】	聖譚曲「救世主」復活第 10 回 発表演奏会 (D 栄光館)	合唱は I : 5 曲 (Nos. 4, 9, 12, 17, 21)、II : 1 曲 (No. 44)、III : 1 曲 (No. 53) 【主催 : DMC】	前窪一雄 (org)
1955-12-24	3 大学合同 (関西学院グリー クラブ、神戸女学院大学音楽 学部、D 交響楽団) (大阪 : 産経会館)	I : 17 曲、II : 15 曲、III : 4 曲、*P 【主催 : DSO、関西学院グリークラブ】	デヴィッド・ ラーソン
1956-12-4 【11】	The M (大阪 : 産経会館)	I : 21 曲、II : 10 曲、III : 4 曲、*P 【主催 : DSO】	宮本政雄
1956-12-8 【11】	The M (D 栄光館)	= 同上、*P	宮本政雄
復活			
1965-12-20 【1】	D 創立 90 周年記念大演奏会 (京都会館)	I : 21 曲、II : 17 曲、III : 6 曲、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	金子登
1966-12-23 【2】	全 D 「救世主」大演奏会 (京都会館)	曲目一覧なし、対訳は挟み込み、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	ロベルト・ ヴリーゲン
1967-12-24 【3】	復活第 3 回全 D 「M」大演奏 会 (京都会館)	I : 21 曲、II : 18 曲、III : 5 曲、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	秋山和慶
1968-12-24 【4】	第 4 回全 D 「M」大演奏会 (京都会館)	I : 19 曲、II : 14 曲、III : 5 曲 (曲順改变)、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	福永陽一郎
1969-12-23 【5】	第 5 回全 D 「M」大演奏会 (京都会館)	I : 21 曲、II : 19 曲、III : 5 曲、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	宇宿允人
1970-12-25 【6】	第 6 回全 D 「M」大演奏会 (京都会館)	I : 21 曲 (No. 21 以外)、II : 17 曲、III : 5 曲、* P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	秋山和慶
1971-12-24 【7】	第 7 回全 D 「M」大演奏会 (京都会館)	プログラム冊子に曲目一覧なし、対訳なし、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	渡邊暁雄
1972-12-25 【8】	第 8 回全 D 「M」大演奏会 (京都会館)	I : 20 曲、II : 15 曲、III : 5 曲、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	山田一雄
1973-12-25 【9】	[第 9 回] D 「M」演奏会 (京都会館)	I : 21 曲、II : 16 曲、III : 5 曲、*P [管弦楽 : 京都市立芸術大学音楽学部有志] 【主 催 : 全 DM 実行委員会】	朝比奈隆
1974-12-25 【10】	第 10 回全 D 「M」大演奏会 (京都会館)	I : 21 曲、II : 17 曲、III : 5 曲、*P 【主催 : 全 DM 実行委員会】	延原武春

表 2 : 演奏曲目一覧 (1933~1974)

略号 : Acc = Recitativo accompagnato, Ario = Arioso, Rec = Recitativo Secco, 欠 = 記録の欠損, × = カットされた曲、
○ = 曲番表示のない演奏曲、△ = 演奏が推察される曲、表内の数字 = プログラム記載の曲番、* = 昼は別除

No.	曲種	曲名/年	1933	1935	1940	1947	1948	1949	1950	1955	1956	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974
第 1 部																					
1	Sinfonia		1	1	1	1	1	1	×	1	1	○	○	1	1	1	○	○	○	1	1
2	Acc (T)	Comfort ye my	×	2	2	2	2	2	1	2	2	○	○	2	2	2	○	△	○	2	2
3	Air (T)	Ev'ry valley shall	×	3	×	3	2	2	1	3	3	○	○	3	3	3	○	△	○	3	3
4	Chorus	And the glory	2	4	3	4	3	3	2	4	4	○	○	4	4	4	○	△	○	4	4
5	Acc (B)	Thus saith the Lord	×	5	×	×	×	×	×	5	5	○	○	5	5	5	○	△	○	5	5
6	Air (B)	But who may abide	×	6	×	×	4	×	×	6	6	○	○	6	6	6	○	△	○	6	6
7	Chorus	And He shall purify	×	×	×	×	5	×	×	×	×	○	○	7	7	7	○	△	○	7	7
8	Rec (A)	Behold, a virgin	×	7	×		6	4	3	8	8	○	○	8	8	8	○	△	○	8	8
9	Air (A) & Chorus	O thou that teltest good tidng	×	8	×	×	6	4	3	9	9	○	○	9	9	9	○	○	○	9	9
10	Acc (B)	For behold	×	9	4	5	7	5	4	×	10	○	○	10	×	10	○	△	○	10	10
11	Air (B)	The people that	×	10	4?	6	7	5	4	×	11	○	○	11	×	11	○	△	○	11	11
12	Chorus	For unto us a child	×	11	5	×	8	6	5	12	12	○	○	12	10	12	○	○	○	12	12
13	Pifa		×	12	6	7	9	7	×	13	13	○	○	13	11	13	○	○	○	13	13
14a	Rec (S)	There were shepherds	×	13(1)	7	8	10	8	6	14a	14a	○	○	14	12	14	○	△	○	14	14
14b	Acc (S)	And lo, the angel of	×	13(2)				×	×	×	14b	○	○	14	13	14	○	△			
15	Rec (S)	And the angel said	×	13(4)	7	9	10	8	×	15	15	○	○	15	14	15	○	△	○	15	15
16	Acc (S)	And suddenly	×	13(4)	7	10	10	8	×	16	16	○	○	16	15	16	○	△	○	16	16
17	Chorus	Glory to God	×	14	8	11	10	8	6	17	17	○	○	17	16	17	○	△	○	17	17
18	Air (S)	Rejoice greatly	3	15	9	12	11	9	7	×	18	○	○	18	17	18	○	○	○	18	18
19	Rec (S)	Then shall the eyes	×	16	10	13	12	10	8	19	19	○	○	19	18	19	○	△	○	19	19
20	Air (S)	He shall feed His flock	×	17	11	14 S + A	12	10	8	20	20	○	○	20	19+20	20	○	○	○	20	20
21	Chorus	His yoke is easy	×	18	12	15	13	11	×	21	21	×	×	21		21	×		×	21	21
第 2 部																					
22	Chorus	Behold the Lamb	×	欠	×	16	1	1	×	22	22	○	○	22	27	22	○	△	○	22	22
23	Air (Alto)	He was despised	×	欠	13	17	2	2	×	23	23	○	○	23	28	23	○	○	○	23	23
24	Chorus	Surely He hath borne	4	欠	×	18	3	3	×	24	24	○	○	24	29	24	○	○	○	24	24
25	Chorus	And with His stripes	×	欠	×	×	4*	×	×	25	×	○	○	25	30	25	○	△	×	×	25

No.	曲種	曲名／年	1933	1935	1940	1947	1948	1949	1950	1955	1956	1965	1966	1967	1968	1969	1970	1971	1972	1973	1974
26	Chorus	All we, like sheep	×	欠	×	×	5*	×	×	26	×	○	○	26	31	26	○	△	○	26	26
27	Acc (T)	All they that see Him	×	欠	×	×	?	×	×	27	×	×	×	27	×	27	×		×	×	×
28	Chorus	He trusted in God	×	欠	×	×	?	×	×	28	×	×	×	×	×	28	×		×	×	×
29	Acc (T)	Thy rebuke hath	×	欠	×	×	×	4	×	×	×	○	○	29	32	29	○	△	○	29	29
30	Ario (T)	Behold, and see,	×	欠	×	×	6*	<u>4</u>	×	×	×	○	○	30	33	30	○	△	○	30	30
31	Acc (T)	He was cut off	×	欠	14	19	6*	×	×	31	31	○	○	31	34	31	○	△	○	31	31
32	Air (T)	But Thou didst not	×	欠	14	20	<u>6*</u>	×	×	32	32	○	○	32	×	32	○	△	○	32	32
33	Chorus	Lift up your heads	×	欠	×	×	×	×	×	33	×	○	○	33	21	33	○	○	○	33	33
34	Rec (T)	Unto which of the	×	欠	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
35	Chorus	Let all the angels	×	欠	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
36	Air (B)	Thou art gone up	×	欠	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
37	Chorus	The Lord gave	×	欠	×	×	×	×	×	×	×	○	○	37	×	37	○	△	○	37	37
38	Duet & Chorus	How beautiful	×	欠	15	21	7	5	×	38	38	○	○	38	×	38	○	△	○	38	38
39	Ario (T)	Their sound is gone	×	欠	16	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	39	×		×	×	39
40	Air (B)	Why do the nations	5	29	17	×	8	6	×	40	40	○	○	40	22	×	○	△	○	40	×
41	Chorus	Let us break	×	×	×	×	9	×	×	×	×	○	○	41	23	41	○	△	×	41	41
42	Rec (T)	He that dwelleth	×	30	18	22	10*	7	×	42	42	○	○	42	24	42	○	△	○	42	42
43	Air (T)	Thou shalt break	×	31	18	23	10*	7	×	43	43	○	○	43	25	43	○	○	○	43	43
44	Chorus	Hallelujah	6	32	19	24	11	<u>8</u>	9	44	44	○	○	44	26	44	○	○	○	44	44
第3部																					
45	Air (S)	I know that my	×	×	×	25	1	9	×	45	45	○	○	45	35	45	○	△	○	45	45
46	Chorus	Since by man	×	×	×	26	2	10	×	46	46	○	○	46	36	46	○	○	○	46	46
47	Acc (B)	Behold, I tell you	×	×	×	27	3	11	×	47	47	○	○	47	37	47	○	△	○	47	47
48	Air (B)	The trumpet shall	×	×	×	28	<u>3</u>	<u>11</u>	×	×	×	○	○	48	38	48	○	○	○	48	48
49	Rec (A)	Then shall be brought	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
50	Duet	O death, where is	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
51	Chorus	But thanks be to	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
52	Air (S)	If God be for us	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×	×		×	×	×
53	Chorus	Worthy is the Lamb	×	×	×	29	4	12	×	53	53	○	○	53	39	53	○	○	○	53	53
	Chorus	Anen	×	×	×	29	4	12	×	53		○	○	53	39	53	○	△	○	53	53

3. 演奏曲目の変遷

これら2つの表から、同志社の《メサイア》演奏曲目の変遷を見て取ることができる⁹⁾。戦前は第2部の〈ハレルヤ〉で終わって、第3部は演奏されていないが、戦後は第3部の終結合唱まで演奏されるようになる。1935年から1950年まで指揮者を務めた森本芳雄（1902～1951）の指導の下で成長した軌跡と見るができる。その歩みを演奏曲目と使用楽譜に注目しながら見ていくことにする。

3-1. 戦 前

1935年の「同志社創立60周年記念音楽會」（10月29日は同志社栄光館、翌30日は大阪中之島公会堂）は、森本芳雄の指揮で、第1部のほぼ全曲（No. 7 ‘And He shall purify’ 1曲のみ省略）と第2部から14曲程度¹⁰⁾が演奏された。「当時同響〔同志社交響楽団〕は弦楽器のメンバーは一応揃っていたが管楽器の奏者がほとんどなかったので、モーツァルト編曲のものは無理なのでヘンドルの原曲の絃パートに二、三の管楽器を加えた原曲でやることになった¹¹⁾」という。NHKが10月29日夜に「その一部を全国中継放送を行なった」が、「時間の都合で第二部の終曲を飾るハレルヤコーラスまでで終わり、第三部は省略され、ハレルヤコーラスはアンコールで終わった」「この時はドイツ語で歌われた」と伝えられる（前窪, 9）。「一覧表」の公式カウントでは、これが「戦前第1回」とされる。

「戦前第2回」の1940年11月23日「紀元二千六百年奉祝音楽会」は、時代の潮流を色濃く反映した演奏会となっている。「宮城遙拝」と「国歌〈君が代〉奉唱」に始まり、「〈紀元二千六百年頌歌〉」「皇軍将士ノ武運長久並戦没将士ノ英霊ニ対シ黙禱」と続いた後、合唱で〈海ゆかば〉（大伴氏立作詞、信時潔作曲）、〈御民吾〉（海犬養宿禰岡麿作詞、中瀬古和作曲）、〈寒梅〉（新島襄作詞、大中寅二作曲）の3曲を歌い、〈同志社校歌〉（湯浅吉郎作詞、大中寅二作曲）を歌って「挨拶」があった。続いて《メサイア》が森本芳雄指揮、同志社大学管弦楽団、ピアノ中瀬古和（1908～1973）、独唱者4人と同志社宗教音楽合唱団（160名）で演奏された。第1部14曲、第2部9曲が演奏され、第3部は省略、歌詞統制のため日本語訳歌唱であった。

この後、太平洋戦争の激化に伴って《メサイア》上演が叶わず、戦後まで中断されることになる。

9) 同志社の《メサイア》演奏の歴史的な変遷については、時々々のプログラム（特に周年記念のもの）に適切な概観があり、それをコンパクトにまとめた記述が同志社交響楽団のホームページにも「全同志社メサイア演奏会の歴史」として掲載されている（<https://alldoshishamessiah.net/html/history.html#admc>）（2023-9-3アクセス）。

10) 冊子が一部欠損しているため、第2部の大半については不明であるが、第1部の最終曲が18番、第2部終わりの〈ハレルヤ〉（No. 44）が第32曲とされているので「14曲程度」とした。この推測が正しいとすれば、第2部全体の半分強が演奏されたことになる。

11) 『同志社交響楽団創立50周年記念誌』（1976年）の冊子に、復活第1回の実行委員長であった西邨辰三郎が寄稿している（p. 71）。

3-2. 戦 後

戦後の再開について、前窪一雄は『礼拝と音楽』1969年12月号（メサイア特集号）に「戦後、戦地あるいは疎開先に四散していた曾ての仲間がぞくぞく帰洛し、OB・OGを主体とする同合唱団再建の意欲がみなぎり…“メサイア”の一部をとり上げ荒廃の中であって、神への賛美を高らかに歌い上げた」（p.39）と書いたが、その実現は困難を極め、「旧メンバーの人集めは並大抵ではなかった」と記している（前窪 2004, 36）。その「戦後第1回」（1946年11月23日）では、合唱3曲（Nos. 4, 17, 44）と独唱曲4曲が演奏された（冊子未見）。

「戦後第2回」（1947年5月25日）は「湯浅先生の総長就任を記念して」と銘打たれている。第1部15曲、第2部9曲、第3部5曲がオルガン伴奏で演奏された。プログラム末尾に「猶今秋、聖誕待望の好き時期にこのヘンデル畢生の大聖譚曲を、更に数曲の合唱曲の他に独唱曲を加へ、欧米諸国にて演奏せられるに準拠したプログラムによって演奏する予定」とあり、実際、同年11月23日に「戦後第3回」の全同志社メサイアとして演奏されたことが「一覧表」から知られる（冊子未見）。

1948年12月5日の「戦後第4回」では、第1部21曲、第2部14曲、第3部5曲が管弦楽伴奏で演奏された。下記の通り、第1部が3つに区分され、第2部と第3部は2つに区分して曲目表示が行われている。

- 第1部：「Ⅰ. 予言」（合唱‘For unto us a child’まで）
 - 「Ⅱ. 降誕」（Pifaから合唱‘Glory to God’まで）
 - 「Ⅲ. 聖業」（‘Rejoice greatly’から‘His yoke is easy’まで）
- 第2部：「Ⅰ. 受難と復活」（‘But Thou didst not leave’まで）
 - 「Ⅱ. 宣教と勝利」（‘How beautiful are the feet of Him’から）
- 第3部：「Ⅰ. 死人の復活と永生」（‘The trumpet shall sound’まで）
 - 「Ⅱ. 神羔讃美」（‘Worthy is the Lamb’, ‘Amen’）

「今回の演奏はヘンデルの原曲をモーツァルトが編曲したもので省略なしの全曲演奏であり私共にとっても大きなところみであります」と冊子に記されている。ここでの「省略なしの全曲演奏」は「第3部を省略せずに演奏する」という意味であろう。実際の演奏では、第2部6曲（Nos. 33-37, 39）と第3部4曲（Nos. 49-52）が省略されている。もっともプラウト版では特定曲（Nos. 34-36, 49-52）の省略が前提とされていたので¹²⁾、当時の標準的な「全曲演奏」と捉えられたものと思われる。

1949年12月4日の「第4回発表演奏会」¹³⁾は前年と同様に、各部内が分ち書きされたプログラムで、挨拶文に「今回は特に学園の全合唱団を総動員し、ヘンデルの原曲をモーツァルトが編曲したものでスタンダードの全曲演奏」とあるが、チラシには「抜粋」と明記され、第1部

12) これらの楽曲は、巻末に補遺として印刷されていた。

13) 冊子には「第4回」と印刷されているが、「全同志社メサイア演奏の歴史、歩み」では「第5回」に位置づけられている（同志社女子大学学芸学部音楽学科 2006, 240）。

18曲、第2部10曲、第3部5曲とやや小ぶりであった。

1950年1月28日の「同志社創立75周年記念音楽会」は、前半に女声合唱や男声合唱、ピアノ独奏があつて、後半が「『救世主』より」であった。第1部13曲、第2部から〈ハレルヤ〉1曲が森本芳雄指揮、中瀬古和の伴奏で歌われた。

1951年11月20日に森本芳雄が急逝した後、副指揮者であった前窪一雄が引き継いで、1951年から1954年まで毎年《メサイア》を上演しているが、管弦楽伴奏ではなかったために、残念ながら冊子が欠けている¹⁴⁾。合唱曲は記録されているが、独唱曲の演奏曲目は分からない部分が多い。

1955年の《メサイア》はユニークである。同志社創立80周年の記念の年で、前年から学内各演奏団体の協議が行われたが、それが決裂して前窪一雄が指揮者を下りた後、同志社交響楽団が中心となって交渉を行い¹⁵⁾、関西学院グリークラブ、神戸女学院大学音楽学部との3大学合同での《メサイア》演奏となった（主催は同志社交響楽団、関西学院グリークラブで、神戸女学院大学音楽学部は賛助）。指揮はデヴィッド・ラーソン David D. Larson¹⁶⁾（1926～1987）で、カットされることの多い第27曲（‘All they that see Him’）と第28曲（‘He trusted in God’）を演奏しているのが注目される。

この1955年の演奏は、同志社学内の諸団体の結集によるものではなかったもので、「一覧表」からは排除されているが、同志社の《メサイア》演奏史を理解する上で重要な分岐点となっていると思われる。1954年までの《メサイア》上演は、同志社混声合唱団の主催によって、合唱指揮者の指揮で行われてきた。これに対して、1955年以降の上演は、同志社交響楽団の主催によって、学外から指揮者を招く形となった（1955年はD. ラーソン、1956年は宮本政雄¹⁷⁾）。

しかしながら、適任者の不在や主要な教員の海外留学等が重なったことも災いして、ここで《メサイア》上演は再度、長期に亘って中断することとなる。

3-3. 復活

1965年の創立90周年を好機として《メサイア》上演は復活を果たす。これ以降の《メサイア》上演は、全同志社メサイア実行委員会主催による「復活メサイア」としてカウントされている¹⁸⁾。

1965年以降の「復活メサイア」でも、学外から指揮者を招く形が続けられた。1965年から順に、金子登（1911～1987）、ロベルト・ヴリーゲン Robert Vliegen（1929?～2005）、秋山和慶（1941生）、福永陽一郎（1926～1990）、宇宿允人（1934～2011）、再び秋山和慶、渡邊暁雄

14) 「一覧表」と見比べると、本稿で未見の冊子は1946, 1951, 1952, 1953, 1954年の5年分となる。

15) 『同志社交響楽団創立50周年記念誌』（1976）は1955年の上演について、「同響〔同志社交響楽団〕の方では言い出したからには面子にかけてもこれを遂行するとの意気にもえ」「急遽奔走した結果」実現し、「実際のマネージメントは全部同響が担当した」「このため本年の定期は中止となった」と伝える（pp. 74-75）。交響楽団側の全力投球であったことが窺われる。

16) 前年の1954年10月に神戸女学院大学音楽学部教授に迎えられた（在任 1954～1968, 1981, 1985～1987）。

17) 宮本政雄（1917～1998）は、同志社大学の卒業生で同志社交響楽団のOBであったが、すでに関西交響楽団の専任指揮者として活躍していた。

18) コロナ禍で中止となった年は別として、「復活メサイア」のカウントは現在まで継続されている。

(1919～1990)、山田一雄 (1912～1991)、朝比奈隆 (19087～2001)、延原武春 (1943生) が招かれて指揮を担った。

「復活メサイア」では、多少の振れはあるものの、演奏曲目はほぼ安定したとすることができる。プラウト版で補遺に置かれた特定曲 (Nos. 34-36, 49-52)¹⁹⁾ は必ずカットされ、その他にしばしばカットされた準特定曲 (Nos. 21, 27, 28, 39) がある²⁰⁾。

その中で目を惹くのが、1968年の大幅な曲順の変更である。指揮した福永陽一郎²¹⁾ (1926～1990) は「『メサイア』の演奏——とくに今回の場合について」と題する一文を冊子に寄せて、《メサイア》演奏の問題点を指摘した上で、次のように論じている。

ヘンデルは、歌詞のテキストの全部に作曲してしまったので、「メサイア」は、一面非常に冗長な音楽になってしまった。それ故、いくつかの曲をオミットして演奏されるのが、世界的な通例になっている。私は、いっそう大きな改変を試みた。前例のないことではないが、曲の順列を変えて、全体を大きな二部に分け、その第一部の終わりのクライマックスに「ハレルヤ・コーラス」を持ってきた。こうすることによって、「ハレルヤ・コーラス」と「アーメン・コーラス」という二大巨峰が近接して演奏されるためにおこる、音楽的感動の相互マイナスを救ったつもりである。

(p. 6)

この時の演奏は次のように組まれている。第1部は3曲 (Nos. 10, 11, 21) を省略した他は順番通りで、それに第2部後半の6曲 (Nos. 33, 40-44) を続けて〈ハレルヤ〉で前半を終える。後半は第2部前半の8曲 (Nos. 22-26, 29-31) に第3部の5曲 (Nos. 45-48, 53) を続けるという形である。

福永は「この順列の変更は、神学的にも、宗教的にも、音楽的にも、形式的にも何等の不自然さをともなわないように考えつくされていて『ヘンデルがやったとおりそのまま』を再現することが不可能な現在、原作の持つ偉大な芸術的価値をいささかもそこねるものでないことを、自信をもって世に問う」と締め括っている。

ところで、福永は5年後の1973年の冊子に「『メサイア』のレコード」を寄せて、次のように綴った。

バーンスタインは、プラウト版によりながら、現代のコンサート形式に合わせて、曲の配列を変えている。これは画期的な試みである。全体を二部にわけ、第一部の終わりに『ハレルヤ・コーラス』をもってくるというやりかたは、合理的だし、私個人も、いまでは『メサイア』をやるとき、この方法に沿ったやりかたを採用している。

(p. 11)

実際、レナード・バーンスタイン Leonard Bernstein (1918～1990) の1956年の録音²²⁾ は、カッ

19) 表2で、これらの特定曲は太字のバツ印としている。

20) なお、1972年の冊子には印刷ミスがあって、歌詞対訳の2頁目と3頁目が逆になっている。

21) 福永陽一郎は1961年から同志社グリークラブの技術顧問であった。

22) レナード・バーンスタイン指揮、ウェストミンスター合唱団、ニューヨーク・フィルハーモニック演奏の《メサイア》(Columbia: M2L 242, Naxos Catalog No. 232751)。

ト曲に多少の食い違いはあるものの、基本的に1968年の福永の演奏と同じ演奏順である。「前例のないことではない」の「前例」がバーンスタインであったことを5年後に種明かしした形となっている。

3-4. 〈ハレルヤ〉の魅力

《メサイア》には魅力的な楽曲が多数あるが、中でも有名なのは〈ハレルヤ〉(No. 44)で、その人気のほどは「表1」にも明らかである。上述の通り、戦前の演奏はいずれも第3部を欠いており、第2部の終結合唱〈ハレルヤ〉で終わっている。〈ハレルヤ〉で終わるパターンが好まれる傾向は、戦後や復活《メサイア》にも垣間見られる。1950年の抜粋演奏はもちろん、1968年に福永陽一郎が用いたバーンスタイン方式も、前半を〈ハレルヤ〉で終えるパターンと見ることができる。〈ハレルヤ〉は、どんなに抜粋しても決して省略されず²³⁾、1曲のみの場合は決まって〈ハレルヤ〉である。

3-5. 省略方法

《メサイア》全曲をカットなしで演奏すると、1回の演奏会としては長すぎる(休憩を入れると3時間を超える)という問題があるため、どのように短縮して演奏するかが歴代の指揮者にとっては喫緊の課題であった。ロジャー・ブリヴァントは「《メサイア》を短縮するには」という一文を投じて、この問題を論じ、いくつかの具体的な方法を提示している(Bullivant 1968)。その中で、クリスマス時期の演奏では受難の第2部(Nos. 22-32)を、復活祭時期の演奏では降誕の第1部をカットするという方法を提示している。いずれの場合も第3部は演奏する形になっている。

表2を見ると、1950年の抜粋演奏がブリヴァント方式に近い。第2部はカットで、〈ハレルヤ〉だけを残している。1940年の上演では、「本演奏は、降誕節に相応しくする為、復活に関する第三部を全部省略、また他にも多くの省略をなして演奏時間の短縮を計った。御了承を乞ふ」との断り書きが冊子にあるように、第2部も半数近くがカットされて、降誕の第1部に重きを置いた選曲になっている。しかし、どちらも第3部を全てカットしており、この点がブリヴァント方式とは大きく異なる。

3-6. 使用楽譜

使用楽譜については、折に触れて言及されるのみで散発的な情報しかないが、基本はプラウト版であったと考えられる。とりわけ復活第1回の際、必要なパート譜を手書きするべくパート・リーダーたちが集まって作業をしていたところ、2～3時間経った頃にメサイアのパート譜を買わないかとの電話があって、それがまたプラウト版だったので、皆が喜んだというエピソードが伝えられている²⁴⁾。

23) 表2で毎回演奏された楽曲として、もう一曲、最初の合唱曲〈神に栄光〉(No. 4)がある。

24) 第25回全同志社メサイア演奏会(1989年12月22日)プログラム冊子に上田弘忠(復活第1回メサイア実行委員で同志社交響楽団OB)が寄稿した「メサイア演奏会によせて」(p. 23)による。

プラウト版は、イギリスの音楽理論家エベニーザー・プラウト Ebenezer Prout (1835～1909) が1902年に出した《メサイア》のエディションで、長期に亘って世界的に広く使われた。上記の注12で触れたように、プラウト版では特定の曲 (Nos. 34-36, 49-52) は楽譜本体とは別に、巻末の補遺に置かれている。これについてプラウトは序文で次のように述べる。

このオラトリオの第2部と第3部のいくつかの曲を省略するのは、今日の演奏では変わる
ことのない習慣である。実際に演奏される曲が連続して現れるように、ここではこれらの
「省略される」曲は補遺に回すことで完全を期している。 (Prout 1902, vi)

中でも1973年のプログラム冊子には、歌詞対訳の最後に「25, 27, 28, 39は都合により省略
させていただきました」(p. 5) との断り書きがあって興味深い。それ以外の省略曲 (Nos.
34-36, 49-52) については断る必要がないという意識をはっきりと示しているからである。「そ
れ以外の省略曲 (Nos. 34-36, 49-52)」は、プラウト版の特定曲ときれいに一致する。

上述の「省略なしの全曲演奏」や「スタンダードの全曲演奏」といった表現に端的に表れて
いるように、「全曲演奏」の概念や基準は時代と共に移り変わってきた。「表2」はそれを如実
に反映しているが、中でもプラウト版の影響は明らかである。プラウト版の特定曲 (Nos.
34-36, 49-52) は、1974年に至るまで一度として演奏されたことはないのである。

4. 運営のあり方

筆者は先に神戸女学院の《メサイア》演奏史を概観したが(津上 2020)、今回、同志社の《メ
サイア》演奏の歩みを辿って見ると、神戸女学院のそれとは大きな違いがあることに気づか
れる。神戸女学院の場合には、戦後から基本的に音楽学部の主催行事として行われてきたの
で、運営上の不安を感じさせることがない。一方、同志社の場合は、戦後第1回から第10回ま
では同志社混声合唱団の主催によったが、1955年からは同志社交響楽団が主催者として、他大
学の協力を仰いだり、学外から指揮者を招いたり、様々な工夫と苦勞で上演を実現してきた。
1965年以降の「復活メサイア」は全同志社メサイア実行委員会の主催となっている。同志社の
《メサイア》演奏は、あくまで学生の自主活動として展開・継続されてきたのである。

プログラム冊子に全同志社メサイア実行委員会メンバーの思いが短文で綴られていることが
あるが、それを読むと、学生の自主活動としての《メサイア》上演に苦勞している様子が伝わっ
てくる。とりわけ「渉外」と「会計」の苦勞には並々ならぬものがあった。「炎天下汗をかき
ながら広告取り」(1974, 10)、「ここ数ヶ月はデートもせずにとだひたすらメサイア、メサイア。
広告取りと一年と一般公募をしごくのにあくせくし」(1971, 13)、「帳簿と金が合わず…眠ら
れぬ夜が続いたこの会計」(1972, 13)、「足掛け七ヶ月の雑務処理と延べ六百時間に及ぶ会議
を経、総額百万円を越す経費を投入して我々は、このたった三時間余りの演奏会に勝負する」
(1972, 15)と綴られ、こうした経験も一つの「教室」とであると記した実行委員長もいる(1968,
10)。

このような苦勞をしながら、年々の《メサイア》上演を代々の学生たちが実現させてきた原

動力は一体何なのだろうか。プログラム冊子に綴られた実行委員長の挨拶文や編集後記を読む中で、その核心を衝くような文章に出会ったので、2点を引用しておきたい。

(1) 第7回(1971年)の編集後記に「第七回メサイア実行委員会一同」名で書かれた

「犠牲の報い」:

最後のアーメンコーラスを恍惚あるいは無の境地で歌い、終わると同時に「終わった! ああよかった。来年も歌おう」と思い、各人各様の思い出に浸るのです。毎年私達はこの「よかった」のために演奏しているようなものだと思うのです。そしてそのためにどれ程多くの時間を犠牲に捧げたことか! しかしこの犠牲は必ず報われるのです。

(2) 第9回(1973年)の実行委員長・石川和雄の巻頭挨拶:

キリスト教信仰の有無の区別なく、メサイアには主イエス・キリストを通しての地の平和を歌った普遍的愛により、そして、ヘンデルの直接的に、量的に、あるいは力強く私たちの心を惹きつけてはなさない音楽の魅力があるからこそ、知らず知らずのうちに、善と悪とが入り乱れる俗世間から心は離脱し、人生的な意味のある音楽の世界へと溶け込んでゆくのです。私たち学生にとっても音楽をしてゆこうとするとき、さまざまな支障がつきまといますが、ただ、芸術という美名のもとに音楽を突き進めていくことなく、確固とした意義ある音楽活動の基盤をこの同志社メサイアに築きたいと思います。

様々な困難を乗り越えつつ、学生の自主的な活動としての《メサイア》演奏を実現してきた代々の学生たちに敬意を表したい。

5. おわりに

本稿は、同志社における《メサイア》の初期の演奏について、その実態を現物史料に基づいて明らかにすることを目指してきた。そのため、同志社交響楽団OB会から提供されたメサイア・ファイル第1冊所収のプログラム19点(1933~1974)と前窪一雄『同志社混声合唱団年譜稿』(2004)を主たる対象として、実際にどの楽曲が演奏されたのかを精査して、2つの表にまとめた。

そこから、(1)戦前の演奏では第2部〈ハレルヤ〉で終わって、第3部は省略されていたが、戦後は第3部の終結合唱まで演奏されるようになったこと、(2)1955年の三大学合同演奏は、同志社の公式カウントからは除外されているが、同志社《メサイア》演奏史上、重要な分岐点となっていること、(3)1954年までは同志社混声合唱団主催で合唱指揮者が指揮したが、1955年以降は同志社交響楽団主催で学外から指揮者を招く形となったこと、(4)1965年以降の「復活メサイア」では、演奏曲目はほぼ安定し、プラウト版で補遺に置かれた7曲をカットする習慣が保持されたこと、等が判明した。

振り返れば、同志社の《メサイア》演奏は、創立50周年(1925)で、男女同席を厭う時風の中、混声合唱を実現して〈ハレルヤ〉を歌い、創立60周年(1935)でNHKの全国中継放送に

よって脚光を浴び、創立70周年（1945）こそ敗戦直後で実現できなかったものの、創立90周年（1965）に8年の中断を乗り越えて復活してきた²⁵⁾。戦争やさまざまな障害による中断を繰り返しながら、周年をバネに、何度も蘇ってきた歴史を有している。その中で、現場の様々な苦労にも拘らず、学生の自主的活動としての《メサイア》上演が脈々と受け継がれてきたことに感服する。それは《メサイア》という作品の力であると同時に、同志社の精神史の一端を雄弁に物語ってくれる貴重な一側面である。

参考文献

- 河村泰子 2020「本邦における《メサイア》受容について」『音楽を通して世界を考える——東京藝術大学音楽学部楽理科土田英三郎ゼミ有志論集』東京：東京藝術大学出版会 54-76
- 同志社交響楽団 OB 会編 1976『同志社交響楽団創立50年記念誌』同志社交響楽団 OB 会
- 同志社五十年史編纂委員会編 1930『同志社五十年史』同志社校友会
- 同志社社史資料編集所編 1979『同志社百年史』京都：同志社
- 同志社女子大学学芸学部音楽学科 2006『音楽学科の変遷——その誕生から半世紀』同志社女子大学学芸学部音楽学科発行
- 津上智実 2020「神戸女学院のヘンデル《メサイア》演奏史」『神戸女学院大学論集』67-2：77-93
- 津上智実 2023a「ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の日本初演——その実態と成立の経緯」『音楽学』68-2：115-129
- 津上智実 2023b「本邦《メサイア》演奏史の基礎史料：演奏会プログラムの行方」大阪芸術大学大学院『芸術文化研究』2024年2月発行予定
- 西邨辰三郎 1969「同志社一戦前」『礼拝と音楽』15-12（メサイア特集号）38-39
- 前窪一雄 1969「同志社一戦後」『礼拝と音楽』15-12（メサイア特集号）39
- 前窪一雄 2004『同志社混声合唱団年譜稿』私家版
- Bullivant, Roger 1968. 'On Shortening Messiah' *Musical Times*, 1968 March, 270; 1968 April, 365-366.
- Prout, Ebenezer 1902. *The Messiah, A Sacred Oratorio, Composed in the Year 1741 by G. F. Handel*, London & New York: Novello & Co.

（原稿受理日 2023年9月20日）

25) このように周年を拾って見ていくと、やはり創立80周年（1955）の《メサイア》上演は大きな節目であり、3大学連携というユニークさの点でも特筆されて然るべきと思われる。